

新潟のユーティエス、新工場稼働へ 半導体部品など量産

信越 [+フォローする](#)

2022年11月2日 4:00 [有料会員限定]

保存



量産品を製造するユーティエスの新工場

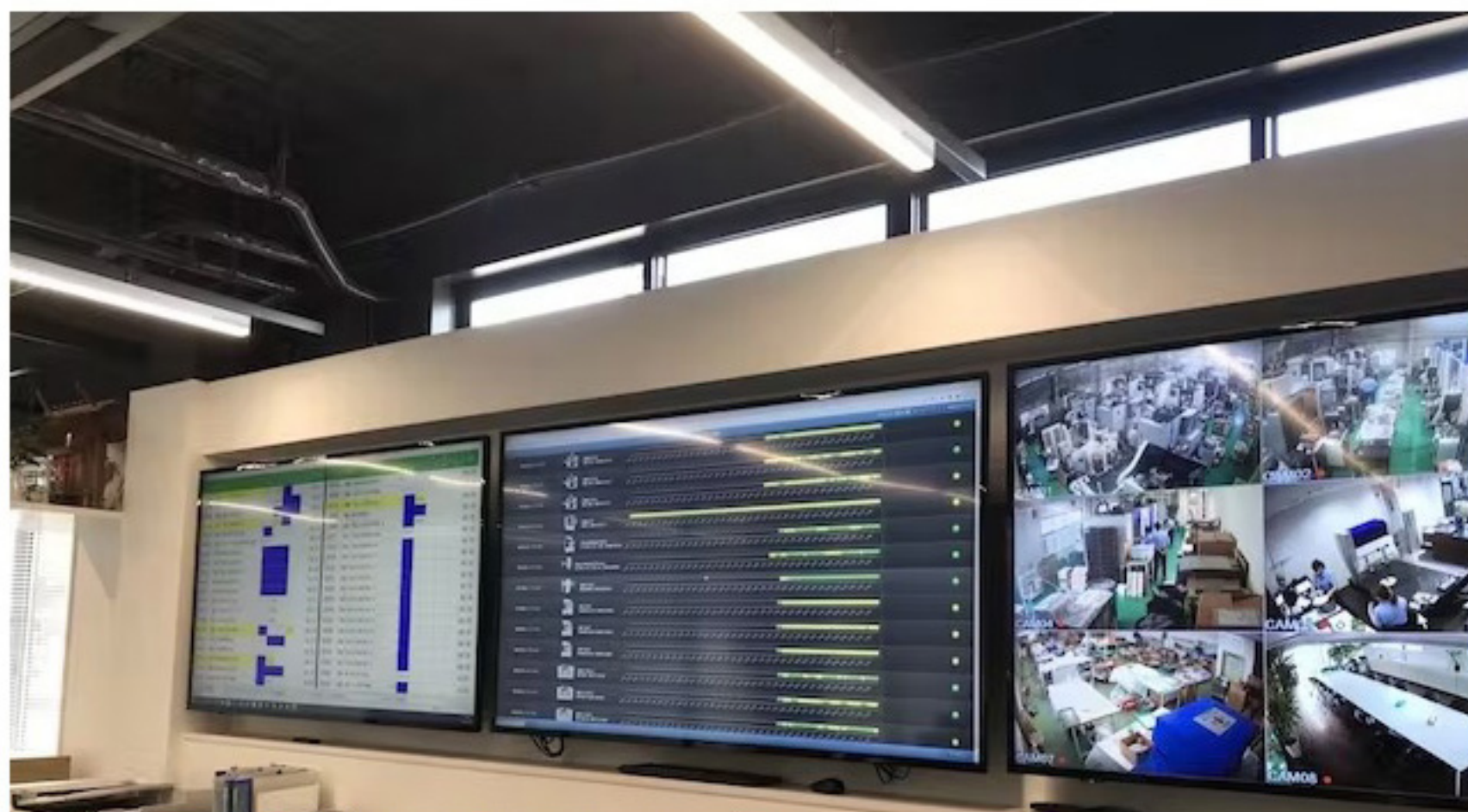
精密部品製造のユーティエス（新潟県燕市）は12月、本社近くに新工場を本格稼働させる。受注が伸びている半導体関連部品などの量産品を製造する。投資額は約5億円。あらゆるモノがネットにつながる「IoT」を活用した工具管理システムなどを活用し、生産効率を高める。生産力増強などで3年以内に売上高10億円を目指す。

同社は飲食店勤務だった白倉幹之社長が2004年に創業した。マシニング（機械加工）によるアルミニウム加工が強みで、半導体関連部品や医療機器部品などを製造する。

新工場では主に、リピート注文の多い製品や量産品を製造する。半導体関連部品を中心に受注が伸びてきており、将来の需要の増加に備える。

新工場の稼働により製品の品質向上も期待する。同社は多品種少量生産を特徴としており、現在は1つの工場であらゆる製品を製造している。量産品の製造には機械を長時間動かす必要があり、振動が他の精密部品に影響を与える可能性があるという。量産品と他の製品の製造場所を分け、リスクを低減する。

新工場では建物の基礎部分を強化し、振動の少ない空調を使うなどして、機械の振動が製品に影響するのを防ぐ。



ユーティエスでは機械の稼働状態などを大型のモニターに表示している

IoTを活用した生産性の向上にも取り組む。同社は超硬工具メーカーのタンガロイ（福島県いわき市）の自動化工具管理システムを導入している。タップやドリルなどの工具を一括で管理でき、加工の際に工具を探す時間や過剰な在庫の削減、工具の使用量の分析などに役立っているという。新工場でも同システムを導入し、さらなる作業時間やコストの削減につなげる。

このほか、機械の稼働状況や製品の製造状態の可視化も推進する。同社では機械の稼働状況を工場や社内の大型モニターで一括表示している。製造現場の社員にはタブレットを配布し、作業者が実施した作業などを入力することで、製品の状態がリアルタイムでわかるようになっている。白倉社長は「労働人口が減少する中で、最新の設備を導入することで、優秀な人材の獲得にもつながる」と話す。

同社の2022年9月期の売上高は約5億円。新工場の稼働を機に受注の拡大や事業の多角化を図り、3年後には売上高を10億円まで引き上げる計画だ。